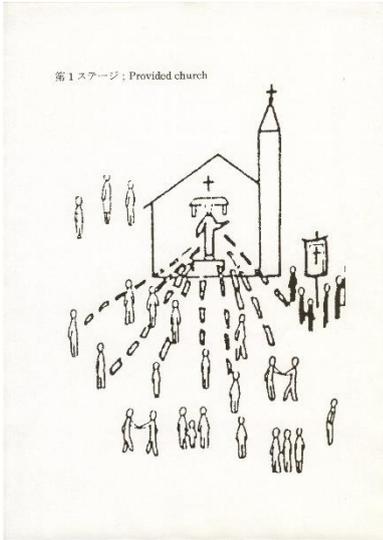


ぜんいんさんか きょうかい めざ 全員参加の教会を目指して(3)

たかまつしきょうく にしかわやすひろじよさい
カトリック高松司教区 西川康廣助祭

I. 教会の成長段階(Stage of church growth)

第1ステージの教会:すべてが準備された教会(Provided church)



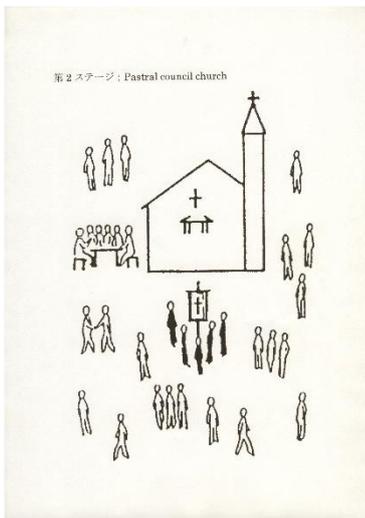
左の絵は、ある意味で第2 パチカン公会議前の教会イメージである。教会堂の中心に、主任司祭・旗周囲の修道者・そして信徒が聖堂へ近づく姿が見える。この絵から想像できることは、日曜日に主任司祭はミサに必要なことをすべて準備した上で信者の来教を待っている。修道者は信徒との交わりはほとんどなく、信徒も幾人かの仲良しグループはあるが、ほとんどは家族単位か個別行動、交わりの姿はほとんど見られない。日曜日に信者はミサに与り、月～土曜日までは信仰とはかかわりなく日常生活を送る、これが信仰生活のように思った。

教皇ヨハネ・パウロ 2世の来日(1981年2月23～26日)が、日本教会に残した課題は「これからの宣教姿勢」だった。教会の福音化は社会の福音化に繋がる。従って、まず教会自身が福音化される必要がある。福音宣教とは、教会の刷新と新しい生命への甦りであり、福音によつて人々の心に真の幸福と生き甲斐を伝え、更に福音が文化全体へ浸透し、いつしか人々を神の民の食卓へ招くことである。

今から35年ほど前に『NICE(第1回福音宣教推進全国会議)in京都』(1987年11月20～23日)が開催され、日本の全教区から司教16人と教区信徒代表・司祭・修道者、合計274名が一堂に会し、日本教会史上初めての全国会議に臨んだ。会議は司教団諮問『開かれた教会づくり』を目指して設定された三つの柱(Ⅰ.日本の社会とともに歩む教会、Ⅱ.生活を通して育てられる信仰、Ⅲ.福音宣教をする小教区)と九つの要項(Ⅰ:①人々と苦しみを分かち合うには②社会の良心となるには③新しい社会をつくるには。Ⅱ:①職場で信仰を生きるには②家庭で信仰を生きるには③青少年が信仰を生きるには。Ⅲ:①地域に開かれるには②信徒と司祭でつくるには③小教区の壁を超えるには)を巡って教区代表者が発題要旨を述べ、後日司教団が答申を検討し、これからの日本教会の方向性を示めた。日本教会はNICEを経て、神の民全員が信仰生活の中でいただいた賜物を持って、社会の福音化に呼ばれている自覚に目覚めた。以後、信徒の役割と使命がますます強調され、生活の場で福音を生きる道を探ることが求められるようになった。

教会の成長段階、第一ステージの教会(すべてが準備された教会)イメージからは、『全員参加の教会を目指す』姿は見えて来ない。次なるステップとして第二ステージの教会「小教区評議会(Pastoral council church)」が必要になる。日本教会がNICE運動を通して、社会の福音化に呼ばれている自覚に目覚めたように、「気づきのプログラム(Awakening church)」が必要となる。司祭・修道者だけではなく、より広範囲の信者の中で「教会とは何か」を確認していくことが必要である。

II. 気づきのプログラム (Awareness programs)



キリストは人々に問題を気付かせるために、説教ではなく譬えを用いて諭した。説教は一方通行で結論に到る過程に人々の参与がない。従って、心に浅くしか根付かない。即、答えを差し出すのではなく、目覚めさせ、気付かせ、考えさせる方法を駆使する必要がある。これが気づきのプログラムである。その養成(光・導き)となるのが、7ステップによるみ言葉の分かち合いである。教会の成長は第一～五ステージ(段階)を踏まえながら徐々に進んでいくが、各ステージにおいて中心になるのは、常にみ言葉の分かち合いである。

第一ステージの教会イメージと第二ステージの教会イメージを見比べてみましょう。バラバラだった教会共同体が、少しまとまって見えます。教会堂の左側にテーブルを囲んで集まっているグループがありますが、

これが小教区評議会のメンバーです。テーブルの中心には常に聖書が置かれ、み言葉の分かち合いが行われている。こうして一般の評議会は、人々は何を求めているかについて議論するが、教会評議会は、神は教会であるわたしたちに何を望んでおられるのかを探し求めていくのである。

さあ、7ステップ方法を用いて『み言葉の分かち合い』を始めてみましょう。最初はステップ1～4まででも構いません。次回は7ステップ方法による、『み言葉の分かち合い』の、実践的なやり方と評価の仕方について分かち合いたと思います。